金のかからない私の暮らし方

大辺道秀

（1）

読者のみなさんは、「無駄づかい」と聞いたら、まずなんと思いますか？　おそらくお金を無駄づかいしないことだとお思いになるでしょう。

ところが、私の場合は、お金ではありません。時間の無駄づかいを言います。毎日、時間を有効活用して頭と心を磨いています。私のいう時間の有効活用とは、おしなべて、一日の内に学習できる時間がどれだけ持てるかによって決まります。夜寝るまでに今日一日をふり返って学習した時間が五時間以内だったら、勉強しないで一日を無駄にしたと反省します。八時間以上勉強できたなら、自分に満足がいきます。満足する日常に生きがいと未来に向っての希望が生まれました。毎日の生活は、知識の横溢が精神に流れ込んで身体の隅々まで充実しているので、生きること自体が楽しんでいるようにさえ思えてなりません。

うつ病に冒された七年間は、白痴の状態でした。白痴の状態を克服した後、普通の人と変わらない大脳の状態から出発して今日まで一年四カ月たちました。のべ日数に換算すると四八五日です。わずかな月日でも人間努力を重ねて勉強すると頭脳の働きと回転が滑らかになって、今まで見えにくかった社会の出来事や自分という人間がなぜ存在するのか、理解できるようになりました。

平成十三年、四十三の時、うつ病に冒されました。一年四カ月前、首から上の大脳を冒したうつ病は除去できたのですが、うつに冒された体力の回復は、万全ではありません。だから、今日までの八年間四カ月、仕事ができませんから収入はゼロです。それでもお金のことは、考えません。無収入でも生きていかれます。千二百万円の退職金を毎月五万円通帳から引き出して、その僅かな金額で衣食住をまかなうことができるからです。

千二百万円の退職金をゼロ円にするまでには二十年の歳月を要します。したがってその間、生きるための手段として労働をして賃金をかせぐ必要がありません。朝から寝るまで時間を独占し、時間を有効活用して勉強ができます。

八年四カ月前、郵政民営化前のある職場でのことです。超過勤務が出された残業を含む十一時間前後に及ぶ苛酷な長時間労働がうつ病を招き、二度と元の頭と身体にもどれなくされました。その時のうつ病が原因して私は、生涯労働から隔絶され、自分一人の力で生き抜くことを命じられました。死の瞬間まで仕事と名のつく労働は、私に限ってなくなりました。

うつ病を引き起こし、そのうつが起因して職員を自殺に追い込む修羅場のような郵便局支

店。生命を蝕む労働を耐え忍び、いかなる労働条件のもとでも、職員は作業量の増大に適応・順応することを求められ、精神と身体に異常を招く労働条件を義務づけられます。職員は子どもと妻、家族のことを思い、考えると、

《物量が増えたからって根をあげるな！　根をあげることは、おれには許されないし、そんなことを考えた日には、職場を去らなくてはならなくなる。子どもらを慕う親心、おれと妻の先々の生活を考えたら、職員が一人ぐらい削られて配達区域が広がって郵便物の量が増えたからって、泣き言は禁物だ。辛いからおれは嫌だと言っていられるご時世じゃねえことくらい毎日のニュース番組を見ればわかる。ホームレスになった失業者が日比谷公園に野宿している惨めな姿を写し出しているじゃねえか。郵便局を放り出された日にやぁ、おれの家族も公園内の野宿とならあな。ましてや御大層な暮らしぶりをしてきた、このおれ様が、ホームレスの仲間入りになるくらいなら、討ち死にしても郵便局に居残ってやるからな！　こうなったらおれが本気をだして、猫の額くらいの区域とその区域の郵便物の量ぐらい屁の河童だ。今に見ていろ、たいして驚くに値しない量が増えただけだと管理者に目に物見せてやる。たかだかそのくらいの量が増えたからって驚くおれじゃないゾ！　なんとかなるようになるさ！　まかせておけ！》

とおのれ自身に強く言い聞かせ、納得するのです。心の奥深くでは定時に終わらない郵便部数だとハッキリ答えが出せて、分りきっていても、意識に思い描いてはならないと見えない外部の圧力が精神と身体に迫ってくるので、本音はご法度です。職員の本心を隠し通す運命に置かれるのが、職場の労働条件です。職員は作業密度が濃くなった現場に身体と心がついて行かれるように自分が慣れ、慣らせられる努力を年々、強いられています。弱肉強食の職場に負けたと恐れを感じた職員は、定年まで後十年以上あると分っていても、年々増え続ける作業量の増大についていかれず、みずからの判断で早期退職に追い込まれます。

精神と身体が破壊されるまで長時間過密労働を繰り返し、その揚げ句には、深夜に働く深夜勤という業務の勤務明けに自宅の畳の上でゴロッと寝たまま返らぬ人となった職員、過労死したその主任と、うつ病に冒されてマンションのベランダから飛び降り自殺した職員を知っています。二人とは会話を交え、雑談しました。無理を承知で働かされて、気付いたら棺の中の自分の姿を発見して、怨霊となって現れた自分の霊が嘆き悲しむよりか、作業に忙殺されて殺される前に職場を去るのが賢明かも知れません。

半年、あるいは三月おきに業務改善命令が出され、そのたびごとに人員が削られ、配達区域が拡大され、増え続ける郵便物の増大に異議を唱えることは、郵便労働者には許されない業務違反と見なされる行為です。過酷な労働条件の中にいたら、いつの日にか精神と身体に異常を来すのではないかと職員一人ひとりが感じ取ったにしろ、職場改善命令が出されるたびごとに、その命令に従うしかありません。職員を人間とみなさない屠殺所のような様相を職場が帯びても、郵便労働者には、弱音を吐くことは禁じられた状況です。家族が生きるために必要不可欠な衣食住のためと思い、一人ひとりの郵便労働者は無理を承知で働いています。子どもの養育費や学費を考えると、生活するための手段として長時間過密労働に郵便労

働者は羊のような装いをこらしてまで従順に従い、精神と身体を慣らさす努力を迫られる運命にあります。弱音は禁物、本音を吐くのは、タブーです。それに上司に逆らえば、赤と身体にレッテルをはられます。

職員が、かりそめにも無理難題な要求に上司に盾突いたとします。上司に抵抗した職員は、赤とレッテルをはられます。そこで職員は考えます。《抵抗の後に周囲の同僚から村八分にされると思うと、怖くて抵抗出来やしない。ならいっそうのことおれは、羊の魂をもらい受け、抵抗できない人間にみずからなってやるゾ！》と人間が職場環境の道具になり下がることを心に誓います。本来人間の目指すべき方向は、環境の奴隷ではなく「主人公」になるようにつくられているのに、あえて「奴隷」になることを心の中で宣言しました。

だが、超過密労働を余儀なく強いられた職員は、近い将来、必ずといっていいほど、うつ病にたどり着きます。私がそうでした。

凡そ三年間、来る日も来る日もふくれあがる郵便物の大量処理に追われ、気付いた時には、精神と身体は破壊されていました。その三年間は、勉強したくてもできなかった生き方・暮らし方でした。

（2）

療養中の七年間、死人のような暮らし方でした。本どころか新聞の活字が全くといっていいほど読めませんでした。読む気力さえ奪われました。テレビドラマやニュースを見ても内容についていかれず、テレビ画面から写し出される人物の動きさえ見るのを困難にされました。テレビを見るのが煩わしく思えて、一人ぽつねんと物思いにふけるようすで座りこむありさまでした。

家の近くにあるローソンに買い物にいくにしても、歩道を歩く足取りがまるで揺れる歩道の上を歩くようで真っ直ぐに進むことを不可能にしました。時々状態を前屈みに折り曲げて老人が腰を折り曲げて歩道に杖をついて歩く姿と生き写しでした。

家の中では、うつ病に冒された当初、二年間の睡眠時間は二十時間でした。起きている時より寝ているのがあたりまえの生活でした。この二年間は、内風呂に入る行為さえ困難にさせ、月に二、三回しか入浴ができませんでした。残り五年間の平均睡眠時間は、十四時間でした。起きられる時間は、十時間しかなく、そのわずか十時間は自由にはなりません。うつ病という恐ろしい病魔は、社会的存在としての私という人間を、社会の枠の外に置き去りにして、労働を通して人間関係の結び付きを奪い取りました。人間との遮断の他に、思考、体力、運動、散歩、娯楽、旅行、映画、音楽、新聞、テレビ、ラジオとありとあらゆる人間にとって必要不可欠なものを奪い取るのを使命とする、えたいの知れない生き物がうつ病です。

七年もの永い年月を脳細胞が使えない状態にされたと想像してください。大脳にウジが湧いて、大量発生したウジが体をよじるように互いによりそい、うごめく様子を想像してください。ウジは大脳の隅々を覆うようして腐乱した脳そのものを憩いの場にしました。悪臭をはなった脳の状態では、人間なら腐乱死体です。うつに洗脳された脳は、人間としての思考

力を奪われているので、機能できない脳髄は、みずから腐る運命に置かれます。

うつ病に冒されないために、人間の生きた才能と能力が備わった脳髄を守るには、社会的存在としての私たち人間にとってうつ病を排除し、寄せ付けない社会的方策が必要不可欠です。うつに冒されないために働く労働現場の改善が急がれます。

人間を大切に扱わない修羅場のような職場環境を打破するための根本的な解決策は、人間を搾取できる体制を変えるしかありません。けれど、体制が変わるまで待っている余裕は、この差し迫った瞬間の郵便労働者にはありません。うつ病に冒されないためには、待ったなしの現状です。

人間が人間を差別し、奴隷のように扱う、社会の根底につくられた人間を搾取できる体制を打ち破る、変革する姿勢と運動に組織された左派系組合に職員がどれだけ結集できるかに勝敗は別れると思います。左派系組織に結集した組合の力量いかんによって当局側から提出された合理化案を粉砕し、反対に組合側の職場改善要求を当局に突き付け、通せるまでの力量がつけば、うつを引き起こす労働現場から人間が働きやすい職場環境にじょじょに変わりつつ、ある時点で、いきなり職場が見違えるほど働きやすい職場環境が出現します。組合運動が大切です。他に解決方法を探そうにも探すそのものが存在しないのでは、探しようがありません。現状維持で、うつ病に冒される恐れのない明るい未来を待ち望むのは、かえって絶望を招く恐れさえ感じられてなりません。

（3）

以前、病院の受付の経理のなにげない一言が、胸にずっしり重く応え、三日間ものが喉を通らなかったことがありました。

「谷崎さん、うつという病名を借りて仕事をしないで、生活できていいわね」

接骨院の受付嬢の冗談まじりで、周囲にいる同業の者を笑わせるつもりで吐いたコトバかも知れなかったけど、私には心臓めがけてナイフを一突き刺されたような、死に値するコトバでした。目まいがして後方にあったソファーに倒れ込みました。受付嬢は自分の吐いたコトバが私をソファーに倒れ込ませたことに一向に気付こうとしません。あたりまえのようにカルテの整理に余念がありませんでした。

うつ病の思者さんには、相手の人が冗談で言うつもりでも、命取りになる場合があるので、言動には細心の注意を要求します。

「がんばって」「散歩でもしてみたら」「元気だせよ」「少しは働いてみたら、うつがよくなるかも知れないから」「毎日なにもしないでいたら退屈だろし、返ってうつを助長しているんじゃない、新宿御苑にいってジョギングでもしろよ」

などと励まされたら、うつの人は《こんなにも毎日寸時もがんばって生きているのに、さらにがんばれというのか！　これ以上に何をがんばって見せろというのだ！　生きること自体に絶望を感じて、それに負けまいとがんばり抜いているのに、……おまえたちは知らな

いのだ。うつ病という恐ろしい病気が、おれの身体を蝕んでいる実態を知らないから、簡単に「元気だせよ」だなんて責任のもてないコトバが吐けるんだ！　おまえらのおせっかいの一言が、おれを殺すに等しいコトバなんだ！　黙っていろ！≫と口には出せないが、他のうつ病の思者さんも私と同じ思いです。だから、うつを思っている患者さんには、励ましのコトバは厳禁です。

うつ病に冒されて思うことは、うつ以前の状態が懐かしく思えることです。あれほど好きになれなかった労働が恋しく思え、再び仕事がしたいと念願するほど、現状の辛辣さが過去に反映するからです。うつに冒された現状が「地獄に落ちた生活」と返す返す思えば思うほど、なおさら以前健康に働いた思い出がよみがえり、あのころは爪の垢ほども気付かなかったし、思いもしなかったあの健康で働けた時は、天国にいる暮らしだったと、うつになって気付かされました。

うつ病は「自殺病」です。うつに頭を洗脳されると、許される行為は、死あるのみです。頭の中は、自殺することばかり考えさせられました。自殺の名所を思い描いては、かつて田宮虎彦『足摺岬』を愛読した思い出がよみがえり、自殺するなら高知県土佐清水まで足を運んで足摺岬の先端の崖の上から足摺海底谷を見ながら飛び込もうかと思ったりしました。

福井県の東尋坊の切り立つ断崖に這い上がり、海鳥が上空に飛び交うエメラルド色の大海原を心に焼き付けて、いっきに紺青の海底めがけてダイブするさまを想像したり、富士樹海の奥深くめざして進む時、ランタンを下げた手が震えながら、あたり背後から魔物に襲われる様子を想像したり、頭の中の考えは死ぬ行為を優先し、他はいっさい寄せ付けませんでした。

就寝、排便、食事は許されますが、その他は一切禁じられた行為です。自殺したい衝動にかられる日々、その衝動をもう一人の私がいつも禁じていました。もう一人の私が自殺を許していたなら、この作品は書かれていませんでした。

（4）

しかし、今は違います。うつ病を自力で克服したからです。そのうつに冒された状態から今では、真に生きた人間らしい生き方、暮らし方に変わりました。うつ病という不幸を「禍を転じて福となし」たからです。

うつ病が原因で死んだものと思い込んだ脳細胞を、苦肉の策に思い付いた「朗読」を武器に活性化を計りました。それが見事に的を得て、死んでウジが沸いたと思った脳細胞が復活を遂げました。脳髄からうごめくウジを入念に割り箸を使って一匹一匹挟んで持ち上げると、怒りを込めてウジを地べたにたたきつけ、靴の裏側でひねりつぶして除去し、ウジを取り除きました。ウジを除去した脳髄に、こんどは布を使って磨きをかけました。頭脳にウジの糞ひとつ残さないほどきれいに磨いたら、頭脳は復活を遂げられました。

黙読では一行たりとも小説を読む気力を起こさなかったけれども、声に出す朗読なら、な

んとかなると思い、読めそうもないというあきらめた考えを打破しました。朗読を開始した頃は一日、五分ぐらいの朗読でしたが、日を重ねるうちに十分、二十分、三十分と朗読時間がのびていき、目標にした一時間まで読めるようになりました。一月が経過した頃、頭の働き、思考力がついてくるのが分りました。朗読を二カ月続けた頃には、うつ以前の状態に戻せたのが分りました。その二カ月間、抗うつ薬をいっさい飲まないで、なにがなんでもうつから解放されたい、と強い意思から自力でうつ病を治したと言えるところまでこぎ着けました。うつから解放されたと思えた日から数えて一年四カ月たちました。首から上の大脳に限り、うつの症状はすっかり影も形もなくなりました。

大脳がうつから解き放されたと同時に身体も改善されたかというと、身体の方が完全によくなったとはいえません。うつ以前の体力が十割としたなら、七割程度の復活です。激しい労働をしたら、たちまち元の木阿弥です。労働はしたくてもできない身体に生涯されました。

療養中の七年間と、長時間労働で自由に使える時間が持てなかった三年間を合計すると、ちょうど十年になります。そして今、自由にできなかった時間を自由に使えるようになり、十一年四カ月前から勉強したくても出来なかった「コトバ勉強」（日本コトバの会）ができるようになりました。うつ病が治り、勉強できる条件が整ったからです。現在、読む、書くことを通じて無知だった過去の自分から解き放される暮らし方です。

私にとって時間とは、幼いころから現在までの自分を振り返り、心に残る失態を思い起こしては考え、反省し、これから先は同じ過ちを繰り返さないと反省する時間でもあるのです。自由時間が持てたということは、才能と能力に乏しかったアタマをよくする、磨けば必ず光る頭脳に変える生き方が出来るということです。

時間を使って、ものごとを見分ける判断力に乏しかった、頭の悪さが原因して起こした、過ぎ去った遠い昔のことを振り返ることができます。例えば、小学生のころや中学生のころの一コマ一コマの失態した出来事や、成人してから現在までの過失を思い浮かべることができます。今日から過去の過ちを反省し、同じ過ちを二度と繰り返してはならないと心に誓うことができます。自由にできる時間があるから出来るので、時間がなければ出来ません。生活の全てが仕事中心に置かれた三年間は、三十分たりとも、許される時間が持てなかったので、過去の反省は望めませんでした。

例えば、青年のころ、憂さ晴らしに酒を飲み過ぎて酩酊しながら新宿歌舞伎町を練り歩きました。ある時、鴨がネギをしょって来る私の姿を見つけた詐欺師は、私を見て見ぬふりをしませんでした。詐欺師は私に近付いて通りをふさぐようにして、若い女性の上半身と顔が何枚か写った写真を素早い動作で見せると、ことば巧みに「かわいい女の子のいる風俗店を紹介するよ」と甘い口車にのせられて、誘導され、薄暗い倉庫のような回りがコンクリートの壁の中に連れ込まれました。その時、仲間と見られる人相の悪い三人の男が後から加わって、私の周囲を四人がとり囲みました。そして、財布の中のあり金全部を奪われました。今でもその金額を忘れません。二万八千円でした。そういった苦い経験を反省したりすることのできる時間です。

時間とは、同じ過ちを冒さない反省の上に立って行動ができる、人にとって大切な時です。反省の上に立った行動は、常日頃の学習を基礎に置いているからできるので、学習を継続しないでいたら、人は同じ過ちを繰り返し、知らぬまに泥沼に埋まっていると思うからです。

（5）

いい例が今の政治です。自民党政治は戦後から今日まで一貫して庶民に対して心が冷え冷えする奈落の底を突き落とす政策と制度を繰り返し実行しました。真面目にコツコツと働いた勤労者をいきなり解雇できる法律案を国会に上程したり、解雇できる法律案は廃案になったものの、巷にホームレスがあふれました。平成二十年の暮れから年越しにかけて新聞紙面をにぎわせたのは、日比谷公園に突如乗れた失業者の群れでした。「反貧困ネットワーク事務局長」の湯浅誠さんは、その頃からテレビのインタビューに出られたり、新聞に顔写真が載られ、世間では「ホームレスを救い出す湯浅」と名の知れた有名人になられました。

失業者としての烙印を押され、ホームレスに転落した人たちは、日比谷公園野外音楽堂周辺や大阪城の周辺に集まりました。自民党を除く各政党の働きかけが実って、年越し失業者になった人たちは、行政から一時しのぎに貸与されたテントを使って日比谷公園内に野宿できました。

大阪城周辺の青テント村で緑の雑草が見えないほど埋め尽くされても、自公政治はさらにホームレスを増やす非正規雇用と雇い止めを増やす政策・制度を改めようとしません。一人ひとりの国民が痛みとなった過去の通過点の一つひとつの制度をふりかえって思い返し、点検し直し、考えようとしないから、いつまでたっても半永久的に自公政治が継続するのです。

仮に自公政治に変わる政治勢力として民主党が政権を執ったにしろ、自民党と政策が瓜二つでは、国民の暮らし向きは悪くなるばかりで、失業者と犯罪者が増え続け、おちおち真夜中に出歩くと身の危険を感じる社会が出現するでしょう。

二大政党は、生まれも育ちも出身地が同じなら政策も同じだからです。自公政治が生んだ悪政を引き続き民主党が継承したところで、なんになります。悪政が変わる根拠が存在しません。根拠のない政権交代の政策宣伝は、国民一人ひとりの肉体と精神がないがしろされ、痛みの限度が最高度に達した国民の思いを逆利用して、政権交代の暁には今すぐにも奈落の底から国民を救い出すことができるという、うってつけの聞こえのよい政策宣伝に他なりません。

自民党の大幹部鳩山邦夫議員は、民主党代表鳩山由紀夫議員の実弟です。もともと民主党代表鳩山由紀夫議員は自民党に席を置いた大幹部の一人でした。前代表を勤めた小沢一郎議員も元は自民党の党首になれるほどの実力者でした。自民党出身議員が多数を占める民主党に政権交代したからって、自民党の政策を真似るようなもので、事態はいっこう変わりません。

私から見ると、二大政党が猿芝居を国民に演じて見せているように思えてなりません。国民の目の見えないところで鳩山兄弟と元自民党幹部が陰で口裏を合わせるようにして与野

党ポーズを演じて庶民をだまし、自民党と民主党の支持基盤の強い農業に従事する農家の人たちをもだましているようにしか見えません。

平成二十一年六月三十日現在、総選挙が目前に迫る状勢です。三年前の参議院選挙の時を思い出していただきたい。ある自民党議員が今、参議院選挙をたたかえば民主党議員に破れると思い、自民党を離党して民主党に鞍替えして、ある地域から民主党の候補者として名乗りを上げたとテレビで流れた報道を忘れません。

この報道の例で明らかなように、二大政党の一方、かりそめに民主党が政権を執ったとします。自民党に代わって引き続き国民のくらしを破壊する政治を実現します。そこでまた国民が「これではいけない。やっぱり自民党が引き続き政権与党だったら、こうまでひどい暮らしにはならなかったはずのところを、おれら庶民は選ぶ政党を間違えた！」と促され、反省させられます。そこでこんどは自民党が「だからいったじゃないか？　民主党さんに政権を渡せば国民の暮らしや平和を守ることができないと、選挙前に自民党の各候補者が釘をさしたのに、おまえら国民がバカなうえに、各候補者の言うことを真面目、真剣に聞かなかった罰だ！」とそれ見たことかといって騒ぎだすでしょう。そして、次期総選挙では、国民の暮らしを破壊した民主党から自民党に政権が返り咲くシステムが出来上がるのです。

少数政党排除の二大政党で国民の暮らしと平和は破壊され、行き着くところまで行きます。失業者の増大に比例するように凶悪犯罪が多発、激増するでしょう。一人ひとりのささやかな暮らしや営業が破壊され、賑わいを見せたあの頃の商店街は、シャッターを下ろしたままの商店街に生まれ変わります。

青年や大人たちは生き方を見失ってパチンコ、競輪、競馬などの賭け事に走ります。身体と心の行き場を失った代償に借金をこしらえてまでして、人間の魂が一時賭けることで自分の命運を試し、踊れるスリルとサスペンスが味わえる極上の喜びを知り抜いている彼らは、なおさら現実の苦しみを忘れさす大博打を打たざるをえません。彼らは魂を踊らせる賭け事をしないでは、一時もこの世の安らぎを得られないからです。

または、昼間から酒を飲むかしなくては、おのれ自身を持ちこたえることは無理なのを彼らは知り抜いています。仕事が持てない手持ちぶさたが災いして《酒の力を借りて現実逃避する、今のおれを救う手っとり早い道なのだ！》と自分に都合のいい言い訳をして飲み始めます。

ところが、危険が目前に迫っています。酔った勢いで怒りに満ちた精神が錯乱をおこしているので、意識せずに知らずに犯罪に走ったりします。なぜなら、思い付く限りの極悪非道な手段を使って自分のいま置かれた現実に対して恨みを抱いて、その恨みを晴らすためには、仕返しをしなくてはいられない憎しみに満ちた憎悪に駆り立てられるからです。痴漢、喧嘩、威嚇、放火、ひき逃げ、追剥ぎ、器物損壊行為、窃盗、通り魔殺人など、素面で出来なかった犯罪を平気で実行できたりします。

子どもたちは授業についていかれず、「落ちこぼれ」と先生と同級生から烙印を押され、烙印を押された生徒は、家に引きこもって家庭内暴力を引き起こす様が見えるようです。

少女は、寂しさ空しさの心の穴埋めに携帯を使って出会い系サイトに登録します。可愛い赤頭巾ちゃんが登録されるのを今か今かと、てぐすね引いてオオカミに豹変した大人が待つとも知らないで、肉体の餌食にされる現実を見ようとしない少女は《すてきな男性と巡り合えるかも》と望みを抱いて出会い系サイトに行きます。ところが、現実は理想と違っていたと一瞬少女は、後悔します。だけど、オオカミ男の甘い口車や巧みな話術に理想の父親像を描かされてとどの詰まりは、万札を目の前でちらつかされ、手の平に握らされると、ためらいがちに淫乱行為に走らざるをえない状態に追い込まれていました。少女を大人顔負けの淫売婦にさせた原因は、悪政が原因だとは、もちろん少女に知るよしがありません。

国民一人ひとりがゆとりを持った暮しができるようになれば、悪政を見破ることができます。考えるゆとりが持てれば、政治は変わります。生活にゆとりが生まれたら、国民は学ぶ時間が出来るので、悪政を見破る鋭く光る二つの目がらんらんと輝きを増します。真の意味での政権交代到来の鐘が高らかになりだすでしょう。

けれど、現在は貧困と無知を生み出す愚民政策に端を発する衆愚政治を知らぬ間に国民が受け入れているので、悪循環してさらなる国民の暮しぶりが毎年悲惨と思える状況を生み出す結果になるのです。

国会での法案の一つひとつを見破れば、真実が明らかです。国民がある一つの法案を吟味する間がないうちに、トコロテン方式にすんなり法案が可決成立する運びの国会運営です。以前なら、政治を左右できた、百議席を優に超えた社会党と少数議席の共産党が共同で悪法成立を阻止できたけれど、今日の最大野党の民主党では、与野党の識別ができません。なぜなら、自民党が提出した、国民にとって悪法と言われる法案に民主党は、ほとんど賛成票を投じているからです。

生きるために最低限度必要な賃金すら危ぶまれる今日の状況です。年収二百万以下の国民が一千万人を優に超えました。二百万以下ではゆとりの持てる生活は不可能です。国民は毎年、賃金が目減りする原因を見ようとしないで、将来不安を抱いた暮しを漠然と抱かされています。抱いた不安を無理と思える苛酷な労働条件を甘んじて受け入れるしか解消の道はないと庶民は思い込まされ、さらなる労働環境の悪化を招く悪循環に一人ひとりの国民が苦しい生活実態に憬らされている現状です。労働環境の悪化が、うつ病などの精神疾患を毎年、大量に生み出しているにも関わらず、その原因を政党政治に見ようとしません。国民の目先がそれて、問題の本質が見えなく、掴むことを許さないマスコミ各社が政権政党の代弁者になりさがっているのも大きな原因です。報道各社が体制側からの巨大な圧力に屈しない主体的力量が内部に備わっていたなら、今のような酷い政治にはならなかったと思います。

総選挙が近付くと政策を掲げて有権者に訴えるのが選挙なのに、政策宣伝をなおざりにして、学問をつんでいないような元プロレスラーや元オリンピック選手の知名度を頼りに比例代表名簿候補者に有名人を登場させ、その有名人に数十万から百万ちかくの票集めをさせ、比例区の当選者を二大政党で独占します。民主党では記憶に新しい芸能人を筆頭にあげるなら、人気・知名度抜群の大橋巨泉さんの知名度を頼みの綱とした選挙をたたかったのを忘れ

ません。大橋巨泉さんは当選後、まもなくして国会議員を辞職されましたが……。

二大政党の選挙は、政策本意ではなく有名人の名をかりた姑息な手段で国民を愚弄した選挙戦術が幅を利かせています。

世の中の仕組み、構造を見抜いた経済学者、哲学者、文学者が国の最高機関である国会に議員として十八名しか活躍していません。

① 経済学者は、資本主義社会の構造を解明しているので、展望をもった国造りの専門家です。

② 人類の生成と発展の歴史的進歩を見抜いた哲学者は、人間に備わった潜在能力を引き出す術を心得ています。子どもから学生、大人、お年をめした方の「生き方」と「生きがい」を目に見えるように教え導いてくれます。さらに広い世界を見渡す学問を勉強しているので、つねに世界と日本の現状を憂え、将来を未然に予測しています。

③ 文学者は、庶民大衆の心の痛みを自分の痛みとして考える専門家です。国民が安心して暮らせる世の中を実現するには、と日夜悩み抜き、国が戦争を引き起こして利潤の追及をたくらむ資本の論理に歯止めをかけさせ、独占資本にとっては金にならない平和な国造りを展望し、平和を実現するために常に努力しているのが、真の文学者です。国民の命と暮し、安心して生きられる社会の実現、国民生活優先の生活向上をめざし先頭にたって悪政を防ぐ防波堤の役割を担っているのが、社会と人間を知り抜いている文学者です。

三人の学者が国会議員となって活躍している政党は残念ながら、あまり好きになれない、むしろ嫌いな少数政党の日本共産党だけです。日本共産党は衆参合わせて七二二議席中十八議席です。国民の暮しと平和が脅かされている今だからこそ、哲学、経済学、文学に秀でた優秀な学者のような党員を国会に送り出さなくてはならないのに、一人ひとりの国民は、衆参国会議員候補者のたぐいまれな人物と見抜けないでいます。共産党の政策宣伝が広く国民に浸透していないので、庶民は分からない、理解できないでいるからです。

個人的には、虫が好かない共産党です。働く者たちが日々自民党の悪政に苦しめられている中で、防波堤の役割を担ってたたかっている政党が存在していたなら、それらの政党を支持しますが、存在しないのでは、きらいな共産党を支持するしかありません。共産党の議席が五十議席を超えるくらいの政治勢力を国会内に実現できたら、暮しと営業が守られます。サラリーマンの賃金目減り政策を止めさせ、失業者の群れを大都会に生み出す政策を廃棄させ、国民の暮しを向上させる政策を実現できます。そして若者を戦場に送り出す徴兵制のもくろみを止めさせ、戦争を起こさせない平和な日本を実現させるよう常に政権与党に睨みを利かせることができます。もちろん大都市、小都市、農村、漁村の区別なく国民本意の政治が実現できます。

ところが現実は、畑違いの有名人を国会議員に押上げたことになりました。哲学や経済学、文学を学んだ学識豊かな「学者」と言われる労働者が、国民の暮しと平和を守れる立て役者になれるのであって、人気女優だった人や俳優、スポーツ選手だった人に国民の未来を託すのは、荷が重すぎると思います。

自殺者の数がここ十一年、三万二千人前後を毎年推移しています。この十一年間で、自殺総数は三十五万二千人に達しました。三十五万都市が一つ消滅した計算になります。自民党政治が生み出した、恐ろしい人災です。

国民一人ひとりは、自公政治が社会不安を生み出した元凶と分かりかけています。けれど、その解決策を一気に願うあまりに民主党政治に願いを託す、短絡的な考えといわざるをえません。民主党は自民党から分離した保守政党です。根っこが自民党ですから、色分け不可能な政党です。本籍が一緒なら政策も同じです。悪政は引き続き継続されます。

（6）

小学・中学・高校の通信簿が「オール1」二十歳まで無学文盲だった私でも、生まれ変われることができました。素晴らしい人間に生まれ変わるんだ、という自信に裏打ちされた勉強は、生きるヒントをこの掌に掴まえたことから可能になりました。ものの見方・考え方を生成と発展の方向に位置づけ、自分の目指す方向に日夜前進する努力に、生きがいが生まれました。

勉強を始めたころは、教科書を終わりまで読了するという漠然とした目的でした。そのうちに教科書を離れた一般書籍を読むうちに亀の歩みを真似て、一歩一歩ゆったりした気分で登りました。周辺景色を見渡し、いずこに自分の未来があるのかなあ、と手探りで探しました。道が発見できました。

現在の教育は、なにか変に思えてなりません。ウサギの早さで目標にした頂上に全速力を出しきって登りついて喜んだ翌日には、その後の未来が見えないので、スタートラインに付いたときの希望の輝きが失せたようすで、いま登った道を下って後退する人がいます。スタートは、全速力で駈け登り、目標にした東大、早稲田と超一流といわれる大学の門を入ったけれど、人生の終着駅に近付いたら、周囲の人たちとの違いが見えにくい東大卒業生を知っています。東大を卒業した目印が身体のどこかにあれば、優秀な人なんだと識別できますが、なかなかそうはいかないのが実状のようです。もの凄い努力で難関の東大を入って卒業されたのだから、一般の「人」で終焉を迎えられるのは、もったいない気がしてなりません。ひとかどの人物と周囲から認められた「死に方」をされたらいいのにと思ってしまうのです。

私の場合、目標は定かでなかったのですが、亀の歩みでのろのろと、小川のせせらぎ、小鳥たちがさえずる緑深い渓谷を眺めては、深い喜びを堪能したり、ときには、大木の木陰で昼寝して、消耗した体力を蓄えたりして歩いていました。何かを求めようと本の活字の上をのろのろ歩いているうちに、人間と社会、人生というものをとことんまで探究することができました。苦難に思えた人生に一輪の花を咲かせることができました。

生きがいの秘訣は、時間の有効活用です。自分を向上させるには、大金を使って大学に入って勉強すれば、すぐにも実現するものと思ってはなりません。せっかちな考え方だと思います。私に限っていえば、通信簿が「オール1」では大学に入れるわけがありません。金も

なかったし、独学しました。独学を継続するうちに知らないうちに知識と教養が身につき、独学する楽しさを知りました。

銭がなくても頭脳を使えば、楽しく生きられます。金がなくても人間には、磨けば必ず光る頭脳を持っています。その頭脳を磨く努力をすれば、バラ色の人生が生まれます。毎日の暮しが充実しているので、ときとぎ「金なんかゴミ屑と一緒に捨ててしまえ！　金という魔物さえこの世から消滅すれば、人殺しや犯罪、貧困や戦争を生み出す元凶、金偏重の世の中から、人間を大切にする社会が出現するんだ！」と叫びたくなる心境になる時が、たまにあったりします。

人生設計に、貯蓄をして一戸建ての優雅な邸宅を建て、その邸宅で一生を送る希望を抱いたせわしない毎日の暮らしよりか、私は生きた時間を有効活用できる学習に、日々生きがいに満たされる人生の方を選びます。お金では買えない時間の有効活用、勉強する仕方を覚えれば、この世に生まれ落ちた瞬間から地獄での暮らししか知らなかった、見なかった私ですら、天国に昇れる暮らしができるものと知りました。お金偏重の世の中にあって、一人くらい私のような時間重視の独学を中心にすえた人生設計をしても、おかしくないと思います。

私に言わせると、時間の使用いかんによって人生は、地獄に落ちた暮らしから、天国に昇れる暮らしができるものと、肌で感じます。今からその生きた実例をお見せします。

結論から先にいうと、時間の有効活用は、極貧にちかい暮しぶりの私でも、心と身体は毎日天国にいるようなルンルン気分になれます。

参考までにちょっと一言、家内が毎月稼いだ、たかだか手取り十三万の薄給と退職金を小出しにした五万、合わせて十八万で二人、生きがいと希望に満ちた人生を送っています。美食重視よりか粗食の方が人生はバラ色になります。決して強がりを言っているのではありません。本当のことだからです。メザシ四匹と梅干しご飯、豆腐のみそ汁があれば、後はいりません。時間の有効活用、独学が精神的な優雅な暮しを構築しているので、白いご飯とメザシ四匹、お新香にみそ汁をすすったからといって粗食と感じられないほど、常日頃の充実した生活が質素な食卓を補って余りあるからです。

私の無駄づかいは、時間の浪費です。一日は二十四時間です。この二十四時間を無駄なく過ごすには、どうしたらよいか、いつも考えています。睡眠時間は夜の十二時と決めています。たいがい起きるのは朝六時です。のこり十八時間を有効に使うように、日々努力しています。

ちょっとその前に、私の生まれ落ちた家庭環境を明かさなくては、過去の私という人間が見えません。かつての私という人間をお見せします。私という人間がどうつくられ、どのように育てられたかを家庭環境に見ることによって説明がつくと思います。

私の生まれ落ちた家庭は、父が「極道」でした。母は父の「奴隷」でした。滋という兄が一人いますが、この男は父の性格と性癖を継承したので、仕事嫌いです。兄は「生きるためにはババアの生き血を吸い続けなければ、生きられない、生活ができないんだ！　ババアを

過労が元で殺すことになっても、おれさえ食べていかれるんなら、母殺しなんてわけなくできるゾ！　糞ババアなんか殺したってかまうことねえ！　息子のために親が死ぬようなことがあったら、それは親として最高の幸せ、願ったりかなったりというものだ！」と息巻いて吠え、自覚しています。母の身体の皮膚に増殖した「寄生虫」の役割を未だに演じています。父は死んでくれましたが、兄は生命を維持するために母から生き血を吸い続けています。父と兄の横暴を極めた家庭は、崩壊寸前でしたが、母ひとりの力でそば屋という自営業で三人の従業員を使って、なんとか崩壊を防いでいました。ところが今では、母が築いた土地建物を全て兄の名義に書き直され、母の血と汗、努力の結晶で構築した家を母は追い出だされました。

父と母は長男を溺愛しました。兄に対しては勉強に必要な道具いっさいがっさい、勉強机から筆記具、ノート、辞書など全て買いそろえて塾まで通わせました。兄には、騎沢大学に入学できるほど学ぶ勉強道具を兄の部屋のいたるところに置かれ、五段ある本棚には辞書類や参考書、地理、歴史などの書物が満杯になるほど両親は買い与えました。

ところが弟の私は、二度目の子どもなので愛情が冷め、ゴキブリを見つけたら足裏で踏みつぶす虫けらかゴミのような存在に見られました。屑同様に両親から見られたので、自分の部屋はありません。物置で寝かされました。それだから、机から筆記用具、ノート、辞書にいたるまで、国から支給される国定教科書のみで、買いそろえてくれませんでした。勉強道具を買い与えたところで、金をドブに捨てるものとの判断から両親は、幼かった私から勉強する楽しさを一切奪い取りました。中学三年の時の通信簿は、見事なまでに横並び一線の「一」がズラリと並びました。両親は通信簿の「オール１」を見て、私を自営業のそば屋の出前持ちにでもさせて、生涯母の庇護の元に奴隷となって働くよう命じました。

三月生まれの私は、中学卒業と同時に十五になったばかりでした。昨日まで十四歳だった私は、もうこれから先、一生涯遊ぶことが許されないのだと知ったとき、始めて両親に高校に行きたい旨を伝えました。両親はしぶっていましたが、当時は金さえだせば入れる高校がありました。母は十五歳から朝は七時ごろから夜は夜中の十二時ごろまで、そのころは営業していたそば職人にさせるのは、かわいそうだと思ったようでした。母は父を説得して、ある高校に裏口入学をさせてくれました。その高校を卒業する時には、やはり通信簿が「オール１」でしたので、裏口卒業でした。

二十歳のころまで自分の名前を漢字で書くのがやっとの状態でした。なにしろ死ぬことも生きることも全くと言っていいほどできなかったので、生きること自体が壮絶な苦しみでした。石川五右衛門が京都三条河原で釜煎にされ、足裏からじわりじわり火傷を感じ、全身煮えたぎる熱湯で悶え苦しみながら、死をまじかに感じ取った時のような心の状態でした。生き抜くこと、死ぬこともできないとあきらめた時ほど、残酷で惨めなものはありません。自殺でこの世を去ることができた人が、あのころの私には、うらやましく思えてなりませんでした。

脆弱な私は、いつまでも永遠に、悲惨な状態を維持することは、とても不可能でした。ま

た、そんな拷問をいつまでも我慢、辛抱できるほど心が強くありません。最後に残された道は、苦しい現実から逃れる道を探し求め、解放の道を見つけだすしか、もうおれには打つ手がないんだ、と気付かされました。周囲を見渡せば、相談する人がだれ一人、人っこ一人見つけだすのも困難な事態の中で、家族からの虐待に似たいじめ、周囲の人間と、社会の見えない圧力のダブルいじめに会わないようにするにはどうすればいいんだと毎日、悩み抜きました。考え抜いた結果、いじめから逃れる手段として「独学」して自分を変える道しか、もうおれには残されていないんだ、と悟りました。他人がそう簡単に真似できそうもない独学です。二十年間、学んだことがなかったので、学習の仕方も方法もなにも知りません。無謀とも思える独学に挑戦することになりました。

勉強を始めたころは、勤め先は郵便局ではなく常磐線柏駅前の卸問屋に勤めていました。十八で家出してから三月が経過したころ、高校の時、英語担当だった品川先生という四、五年したら定年だろうと思われた教師にひょんなところで再会しました。山谷からさほど遠くない「みとやホール」というパチンコ屋がありました。パチンコを打つ台が先生と偶然隣り合わせに座ったところを発見され、土方の稼業から救い出されました。先生の尽力でその日暮らしの生業、日雇い人夫から足を洗うことができ、卸問屋の社員になれました。同時に六人の日雇い人足が六畳の間に宿泊する、三段ベッドが二つ置かれた木賃宿から柏の社員寮の一員になれました。

卸問屋に勤めて二年が経過しました。社員寮は六畳部屋が一階に一部屋、二階に六部屋あって二人で一つの部屋を割り当てられました。食事の世話をする七十に近い寮母さんを含めた十五人での日常生活を体験しました。相部屋と決められた六畳間だと、書店から買った本を広げて読むことはできません。人の洋服ダンスと家具だけで寝る畳がなくなるほどなので、本を広げて読むゆとりが持てません。なんとか独学がしたいと思い、寮を出ました。二年間、勤めて貯蓄がほんのわずかでしたが手元にできたので、柏で一番安いアパートを見つけて、そのアパートに入りました。当時、敷金と礼金、一月分の前納費を合計すると十一万円で、月額八千円の安アパートでした。九時間以上、汗水たらして働いて稼いた賃金が、そのころ六万五千円でした。

小学校低学年で学ぶ一年、二年、三年生用の教科書を神田の三省堂書店から買って独学しました。夜更けの三時頃まで一人黙々と勉強しました。

独学をした部屋の中は、最悪でした。不潔で汚れた四畳半のアパートの二階は、一階の大家が米屋だったので、ネズミが大量発生しました。地面にこぼれた米をネズミが食べるのに最高の居心地のいいところです。ネズミの繁殖が中途半端な数ではありません。まん丸に太ったドブネズミのような、二本の牙が鋭く尖ったノコギリ歯からチュウチュウ言わせて共同トイレの前を走り回っていました。勉強の間じゅうネズミが天井裏を走り抜けるドドドーという凄まじい轟音の響き、今なら気になって勉強どころではありません。

恐ろしく太ったネズミがアパート全体を包囲しています。ネズミが走り回るとき、全身の毛から吸血鬼のダニをばらまくので、部屋の中でのダニの繁殖は物凄い量でした。日曜ごと

にバルサンを炊いてダニを殺してからでないと、とても住める部屋ではありません。バルサンを炊いてから三日くらい経過すると、身体の皮膚のどこかしら太股、へそ周辺から胸部へダニが輪を描いて遊んでいる姿を見かけました。指先で力一杯皮膚の上から押さえ付けても、ダニは指先と皮膚の間からスルリと抜けて、また輪を描いて走り回ります。ダニを捕らえるのには、一種の芸当が必要で、爪の細い先でダニを捕らえなければ、ダニを殺すのは不可能だと体験学習で知りました。破れかぶれでじかに皮膚の上からダニめがけて殺虫剤を噴射してダニ退治しました。

そして一日一回は、どす黒くて大きな太ったゴキブリが天井や周囲の汚れた壁を縦横無尽に我が物顔でゴソゴソ音をたてて歩くのが深夜だと分るのです。気持ち悪いゴキブリの歩く音を聞くたびに、手元に欠かさず置いた殺虫剤をゴキブリめがけて噴射しました。

窓を開けると隣家の洋食レストランと接触するくらいです。窓を開けたまん前が調理場になっていました。調理場の炒めた油の混ざった生硬かい臭いヘドロのような熱風が窓を開けると入るようになっていました。窓の前が換気扇になっていたからです。夏はレストランの建物が風の通路を遮断していたので、風が部屋に入りません。それなのにこんどは、部屋の暑さから逃れるために、臭い油のシャワーを浴びせられる思いで窓を開けると、夏の暑い盛り七月から九月中旬まで部屋の温度は四十度に達しました。部屋の中は金蝿と蚊の大量発生する場にふさわしく真夏の三カ月間、蚊取り線香をたかなかった日がありません。

ダニ退治をしたと思っても、朝日覚めてみるとこんどは、南京虫の襲撃にあい、身体のいたるところが水膨れの状態でした。蚊と金蝿、ダニと南京虫の同時攻撃にあっては、この部屋に私が入る前にいた女性が、入ったと思ったらすぐに引っ越した、と真向かいの部屋の主婦が首をかしげて話したのがうなずけました。

朝目が覚めても部屋の中では、昼夜の識別はつかない部屋でした。冬は寒くて全身ぶるぶるふるわせていました。そんな最悪な環境のところで、独学が開始されました。教師のような人はだれ一人いませんでした。

独学を始めてから三年間の平均睡眠時間は、三時間でした。夜中の三時か四時ごろ寝て、三時間後の七時には自然に目が覚め、仕事に行く準備をしました。当時の歌謡界を賑わせたあのころ懐かしい三人娘——山口百恵、桜田淳子、森昌子の存在を、巷でときたまラジオから流れて聞こえてくる歌声に《ああ……確かあの声の持ち主は、山口百恵だったな》と記憶をたどるくらいで興味を引きませんでした。三年間、独学に挑み、歌謡界の全ての歌手と芸能人、俳優、女優、プロ野球選手、プロレスラーなどが脳裏から消えてなくなりました。小中高校で学ぶ勉強を二十歳になってから労働をしながら渾身の力で学んでいたので、勉強する対象以外、勉強することだけに全身全霊集中していたからです。もちろんテレビを必要としなかったので三年間、テレビのない生活でした。

しかし、録音できるラジオは必需品でした。独学が三年目に入ったころ、当時のラジオでは、平日と日曜に「通信高校講座」を放送していました。高校で学ぶ全ての教科が学べるように授業内容がくまれていました。勤め人の私には全ての教科を学ぶことは不可能でした。

せめて人からバカにされないためにちゃんとコトバが話せるようにと思い『現代国語一二三』を中心にして『日本史』『世界史』『政治・経済』『倫理・社会』などの授業に力を入れました。残りの『英語』『数学』『古典』『生物』『物理』『地学』『音楽』などは時間が持てなくて勉強できませんでした。八年後、三十一のときから『英語』を独学で十二年間、必死の思いで勉強したけれど、ものにできませんでした。

勤めが終わると、すぐにアパートに飛んで帰りました。午後八時からの放送がほとんどだったので、自分に課した授業を全部勉強しました。録音した授業を理解するまで何度も繰り返し聞きました。そのうちテープが伸びきって使えなくなったものさえ出ました。テープが使えなくなるまで聞いたということは、それは生死をさ迷わせるほどの、血みどろの狂気に近い勉強を演じたことになります。のたうちまわるほど苦しんだ過去がよみがえって、自分に残された最期の勝負に出たからには負けは許されないんだ！　と思ったからです。二十歳で始めた独学の勝負に負けなかったので、現在の私が存在できたのです。

あの生死を選びとることができなかった絶望のどん底の徘徊の日々から這い上がりつづけて、はや三十一年が経過しました。いま五十一です。その間、苛酷な長時間労働とうつ病が災いして十年という永い年月を独学することが許されませんでした。けれど、二十一年間独学を続けた習慣は、死んでいません、生きていました。

昨年三月から学ぶ習慣を復活させ、時間さえあれば、どんな人間にでもなれるという自信がつきました。私は売れない作家になるために目標に向って独学しています。

今の私は、世界文学全集を乱読しています。ロシア文学、フランス文学、イギリス文学、ドイツ文学などを読んでいます。近ごろでは、ドストエフスキー全集、ゴーゴリ全集を読み終わった直後にトルストイ全集を読破し、今またバルザック全集二十六巻のうち十七巻を読み終わりました。全集以外で読んだのは、ロシア文学では、プーシキン、レールモントフ、ツルゲーネフ。フランス文学では、『赤と黒』『パルムの僧院』スタンダールと『ボヴアリー夫人』『感情教育』などフロベールをよく読みました。『カルメン』『コロンバ』メリメも読みました。イギリス文学では、『ジェーン・エア』『嵐が丘』のブロンテ姉妹とオースティン『高慢と偏見』『エマ』『マンスフィールド・パーク』などを笑い転げるほどおもしろくて繰り返し読みました。ドイツは『魔の山』で有名なトーマス・マンです。アメリカ文学では、『白鯨』のメルヴィルでした。一年四カ月で文庫本を合わせると百冊以上の文学作品を読んだことになります。文学作品の合間には、哲学と経済学の書物も読んでいます。哲学は三木清『哲学ノート』新潮文庫、高橋庄治『人民の哲学』青木文庫など数冊、経済学は主にマルクス『資本論』を読んでいます。他にも長編・短編自伝小説をおよそ五作品、千五百枚以上を書き上げました。

私の例で分ると思いますが、人間の頭脳は、素晴らしい機能を備えています。脳を生かすも殺すもあなた次第です。人間の頭脳は、黄金に輝いた脳です。脳は磨けば、必ず光るようにできています。大人からお年寄りまで、時間を有効活用すれば、今から新しい人生が開拓

でき、人生のやり直しができます。生きること自体が「なんと幸せに思える人生なんだ！　喜びに満たされた生き方とは、この学習する過程から生まれるんだ！」と思うようになりました。

子どもや学生は、テレビを見る時間を一時間削って読書にあてれば、頭脳は見る見る光り輝いていきます。毎日本を読む読書習慣が人生を楽しいものにしてくれます。

（7）

先週の木曜日、思わぬ時間の無駄づかいをしました。痛恨のきわみです。原因は女でした。それも私からみたら、娘とも思える若い二十四の女でした。色艶のいい乳色に輝いた、若さあふれる瓜実顔をした、おやじ心をくすぐる美女でした。

私の住むマンションの一階に理髪店があります。その店のマスターとは顔なじみです。床屋にいくたびにマスターは、

「谷崎さんは、いつも自宅にばかりいるようで飽きないの？　おれなんか若い女を四、五人、いつでも好きな時に呼びよせる状態にしてある。女なしじゃ、この世の中、なにが楽しみで生きていいのかわからない。息子は二十三で独り立ちしているし、女房はおれに屁もひっかけないほど冷たくあしらう。こうなったら、五反田祭りの青年部に顔を出すこのおれが、一人の若い女をものにできると、芋づるしきに新しい女と知り合うことができる。谷崎さんも一人いい子を世話してあげようか？」

気炎をあげるように言います。生まれてから今日まで、夏目漱石や太宰治の小説など読んだことがなさそうな、にやけた、目尻のさがった表情が、見るからに女好きだと顔に書いて歩いているマスターです。

私はその時、思いました。《五十に手の届きそうな、さほどおれと違わない年齢の床屋が、二十代の女性に好かれるとは、男にとっての快楽が、不思議とも思えるほど手軽に味わえるとは、男と女の性欲を後押して奨励する、歪められた現代社会では、起こるべくして起こる出来事なのか？　珍しい珍事でもなくなったんだ。おれの今までの考え方と現実の社会とのギャップ、ズレが生じたんだ。おれは旧態依然の考え方に固執して、女性を美化しすぎていたのかなあ……》と思わずにいられませんでした。

そのマスターが先週の木曜日の夕方五時ごろに、自宅に電話をしてきました。

「若い女が一人と四十一になる年増と二人して店に遊びにきている。おれは今、客の頭を刈っているところで二人の相手ができないで困っている。どうかひとつ、二人を店からつれだして遊んでやってくれないか？」

ここ十年以上も若い女性と会話したことがなかったので、まだ会ったことのない美女らしいと想像する若い女に興味を抱きました。「それなら、一時間ぐらいなら、喫茶店でお茶でも飲みながら相手してもいいよ」といってしまったのです。この一言が結果して大変な時間の浪費につながるとは知らないで……。

十分後、床屋にいくと、若い女と主婦らしき女性が椅子に腰掛けて私の来るのを待ってい

たようでした。主婦らしき女性の器量は、お世辞にも美しいとはいえない、やつれた表情にみえました。細面の頬がこけた、目尻に細い皺が年輪のように刻まれ、濃い化粧の後が肌になじまず、地肌に浮き彫りになった、動物にたとえると、カマキリに似た、ぎすぎすした感じの痩せた女性でした。

私は開口一番、「やあ残念でしたね。もっといい男が来るだろうと思っていたら、こんな禿おやじと分って内心残念がっているね、君たちは」といって《ざまあみろ》と内心思ってワハハハと笑ったら、さすがに中年女性、人生の苦難を乗り越えたつわもの、切り返しが見事でした。

「いや、そんなことありませんわ。わたし、禿おやじが大好きなんです。別れた主人も禿げていましたから」と甲高い声をあげて話したので、《この女、できるな》と思いました。

それから三人して五反田駅前の喫茶店にいって、コーヒーを飲みました。もちろん私のゴチを覚悟のうえです。

私は年会費一万円で安い教育が受けられる「日本コトバの会」という民間教育団体の一員です。「日本コトバの会」では「小説の会」「文章教室」の他に「話し方教室」もあります。その「話し方教室」で私は「話上手は聞き上手」を学びました。

女性と接点のなかった私がその学んだ極意を実際に応用しました。威力が発揮されました。「話上手は聞き上手」を武器に、後から年齢を聞いて分ったのですが、二十七離れた娘のような乙女との会話を試みました。分りやすくいうと、一文には必ず判断が伴います。その判断を元にした会話を固く守って、そのテーマを掘り下げ、乙女に考えさせる話術を試みました。

するとどうでしょう。話しが盛り上がること盛り上がること、二人の女性がいうのには、「わあ、聞き方や話し方がまるで学校の先生みたい。こんなおもしろい先生だったら、授業がたのしかったろうなあ！」と喜び、叫んでいました。

話の内容を二つほど披瀝します。私が若い彼女に「今付き合っている彼氏がいるの？」と聞いたときのことを話します。

「いいえ、今はいません。以前いたけど、別れました」

「別れた理由は聞かないけど、どんな男性を待ち望んでいる？」

「やさしい人」

「やさしい人って君、それだけじゃわからないよ。どこがどうやさしいのかいってごらん。例えばの話だけど、ものを買ってくれるからやさしい、あるいは、万札を数枚、財布から取り出すと、小遣銭だといってぐれる男がやさしく見えるとか、またはエッチするとき、やさしく身体を触ってキスしてくれるとか、いろいろ理由があるだろう。どういった時にやさしい男性に思えるんだか、よく考えていってごらん」

「エッチは好きだけど、それよりか、もっと違うことを男に望んでいる。ええと……思いやりがあって、他の女に目を向けないで、わたし一人をいつも見てくれる人がいい。浮気を絶対しないでわたしだけを愛してくれる男性が好き……。

おじさんは、心のやさしい人に見えるから、おじさんだけに本当のことを話すけど、今までだれにも言ったことがない秘密を打ち明けるけど、床屋のマスターにも内緒にしているから、言わないで。隣のエミさんには、秘密を打ち明けたけど、両親は知らない、秘密にしている。尊敬している両親には口が裂けてもいえないことを話すから聞いて……。

実はわたし……十代の後半に、妊娠三カ月を過ぎていたけど、生まれてくる赤ちゃんを無理やり下ろした。赤ちゃんの水子供養を毎年欠かさないでいる。相手の男は見た目は、背が高くてかっこよかったけど、根性の腐った悪い男だった。いけ面の人をかっこいいと思って憧れていた十代のころだから、相手の性格と人柄を確かめようとしないで一目ぼれしたわたしにも原因があった。やさしいことばを巧みに使われて、嬉しくなって彼から離れようとしなかった。そうしたら、会ったその日の夜に、いきなりホテルに連れて行かれていきなり裸にされ、身体をもてあそばれた……。

その日を境にして仕事帰りに会うたびにデート場所はホテルと決まった。飯ぬきで淫らなセックスを毎晩して、風呂の中やベッドの上はいつものことだけど、絨毯の上やトイレの中にまで押し入ってきて、見境つかないほどになって、ところ構わずわたしを裸にして、犯した。一晩で七回も犯されたこともあった。もの凄く性欲の強い男だった。一皮むくと、野獣のような男に身体をもてあそばれているうちに、警戒心が薄れていたのね、知らぬ間に妊娠していた。妊娠したと告げると、いきなり姿をくらました。携帯その他、一切連絡が断たれた。経済的に一人では子どもを育てる自信がなかったから、姉の子も他人の子も好きなわたしが、愛さずにいられない子どもと分っていたけど、無理やり下ろした。元には戻らない傷ついた身体にされた。子殺しと、心をもてあそんだ悪党に、奈落の底に突き落とされた思いが今もってしている。悔しい。いけ面づらして男前を鼻にかけているに違いない竜二を呪っている」

「へえ！　物凄い、小説のテーマになる話だなあ。……エミさんが君のことをナオミと呼んだのを聞いたようだけど、間違いない？」

「友達はみんなわたしのことをナオミというし、エミさんもナオと呼んだりする」

「そうか、君はナオミちゃんというのか。じゃナオミちゃんに聞くけど、君は男運がなかったんだなあ。おそらくその性欲旺盛な男は、若い男だったんだろう。どこでどう知り合ったなんて野暮な詮索はしないけど、それ以来、男運はないというわけか」

「祭りの仲間はいるにはいるんだけど、身体目当ての男が多くて、深追いしない。祭りの会合が終わった後は、たいがい宴会が始まり、飲み終わって帰る時になると、酒に酔った男衆の中から一人か二人付きまとって、最後までしつこく残った男が、わたしを放そうとしない。肩や腕に手をかけるようにして、五反田駅裏側に素敵なラブホテルがあるから行こうとわたしを誘う。スケベな男ばかりで、もう淫らなエッチはいや。本当に好きになった人となら、誘われたらホテルにいくけど、あんな頭の悪い男とはもう行きたくない」

「おれとならいいかな……」自分の顔に指先を向けました。

「え！　うそ！　冗談でしょう」と彼女はあっけにとられた真顔で言いました。

「ああ、そう。今のは冗談。今の時代は、エッチが最初で、それから相手を知る、昔とは逆になっているものなあ。邪道だ！　天と地が逆様になった恋愛遊戯だ！　美しいはずの恋愛感情がセックスが初めにありきでは、育つわけがない。女性の方から見たら、男の欲望をかなえさせてやってからでないと相手をした男の性格とか人柄を知ることができないなんて、不公平だし、女体を奪ういかさま師、詐偽行為だ！　満たされた獣欲の後から恋愛感情や愛情を深めよったって、そんなのナンセンスだ！　偽善だ！　女性を単なる性欲の道具、はけ口としか思わない男のエゴだ！　女性は男の身勝手な欲望の餌食にさらされているのが、今の風潮だ。そんな風潮はおれは、断固反対する、許せない行為だ！

おれらの若かったころは、彼女のハートを射止めてからでないとホテルだなんて考えられなかった。今は時代が変わった、困ったものだ。これでは男の餌食になる若い女性が君以外にも沢山いるだろうなあ。かわいそうに」

「おじさん、今では、相手の男性をよく吟味してからでないと、身体を許さないことにしているから、安心してよ」

「君、それがいいよ。ナオミちゃんはプロポーションが抜群だから、年とったおじさんのおれも、君のくびれた腰とスラリと伸びた白い両膝、それにもりあがった豊かな胸元をまじかに見せられると、ムラムラするくらい性欲が内心、騒ぎだすよ、これもいかんせん自然のなりゆきで、困った下半身だ！」

こういった会話が三時間以上続きました。

次に上げる会話は、旅の話が始まり、内容を掘り下げることにしました。

群馬県の尾瀬ガ原に若い彼女がいったことがないと言いました。そこで私は中年のエミさんに向って、「君なら尾瀬にいっているはずだから、一つ尾瀬の思い出話を聞かせてくれ」と彼女に話させました。エミさんは思い出をほじくりだして、水芭蕉の存在にたどりつきました。私は間髪を入れずに「ナオミちゃんがわかるように、永芭蕉の唱歌を歌って現地にいるような気持ちになって聞かせなさい」といったら、「はい、先生、歌います」といって大きな声で本当に歌いだしました。

「夏が過ぎれば思い出す、遥かな尾瀬、遠い空、水芭蕉の花が咲いている、青い空……」

周囲に座ってコーヒーを飲んでいた喫茶店のお客さんは、カラオケ店でもないのになぜ歌うのか、と驚いて、一斉に私たちを睨みつけました。彼女は非難の一瞥に動じなく、歌い始めの一章を見事に歌い終わりました。

エミさんの歌に感動したナオミちゃんは、「わたしが学校で習った時には、水芭蕉の唱歌はなかったけど、カラオケで覚えることにする。本当に尾瀬にいるみたい」と言いました。

そんなわけで喫茶店に三時間以上、そのあと、話が打ち切れなくて、次には喫茶店のはす向いの白木屋という飲み屋に行き、話が続きました。結果として話が打ち止めになったのは、夜中の二時をすぎていました。夕方五時から夜中二時までの九時間もの長話をしてまだ、続きそうなので、私から腰を上げました。私が腰を上げて帰る指示をしたら二人の女性は同時に声を上げました。

「先生！　また会って話を聞いて。また明日の夜にでも会いたい」
私は生まれて初めて若い女性にもてました。
話しの壺を押さえる「日本コトバの会」で学んだ秘伝、「話上手は聞き上手」を実地に応用して、こんなに物凄い力を発揮するものかと驚きました。世代との会話が断絶した今日の社会にあって、私でも若い人たちとも素晴らしい会話ができる話術をものにできた、日本コトバの会で学んだ凄さを身に染みて感じました。「話上手は聞き上手」を学んだ人は、親子の断絶とかいったことはなくなるだろうし、世代間の交流が可能になることを身を持って体験しました。

終わりにあたって

「時は金なり」という諺があります。私の場合は、「時は自分の未来像を描き、描いた未来像に向って亀の歩みのようにゆっくり歩む、人間だけに許された特権」と思います。他の生き物は、自分の未来像を描いて、自分を変えることができない生き物だからです。
私は生まれ落ちた瞬間から破壊された家庭環境で育てられました。父は極道、母は父の奴隷でした。五つ上の兄は、極道の父から遺伝子を受け継ぎ、私を人間と認めませんでした。兄の奴隷にされました。詳しい経過を事細かに書こうと思えば書けますが、いざ書き出したら本になるので、詳しいことは控えさせてもらいます。
ただこれだけが言いたい。獰猛な野獣が二匹、家の中を徘徊し、暴力と野獣のうなり声を密室の家の中で四六時中吠えた、あの恐ろしい幼年少年青年時代だったと今から思いかえすことができます。
三十三年前、私が十八の時、着の身着のまま夜中に家出しました。東京山谷での日雇い人足を皮切りに、卸問屋、郵便局と勤めてきました。家族のいじめから逃れる思いで家出したのに、家族の次にはオオカミが牙を研ぎ澄ませて殺そうと待ち構えた個人と社会のいじめから逃れられませんでした。もうこうなっては、自分を変える以外、いじめから逃れられる術と方法がみつからないと断念し「独学」に走りました。
人間は自由に使える時間さえあれば、理想に描いた人物像になれます。その理想に向って前進するところに生きがいが生まれます。二十歳まで無学文盲の私ですら、生きる喜びにひたった毎日の暮らしです。私より成績の悪かった生徒はいないと思います。読書人生を一歩踏み出す努力をして半年ないし一年継続すると、人生に生きがいと希望が未来にむかって生まれます。
主題に掲げた「金のかからない私の暮らし方」は、理想に向って一歩一歩進めば、人生は楽園に近付ける事実を証明したかったのです。